人が、街が失われた2011年３月11日の“あの日”。今、ゆっくりと未来へ歩み始めた。被災地の復興に挑む医療者たちの心を届ける

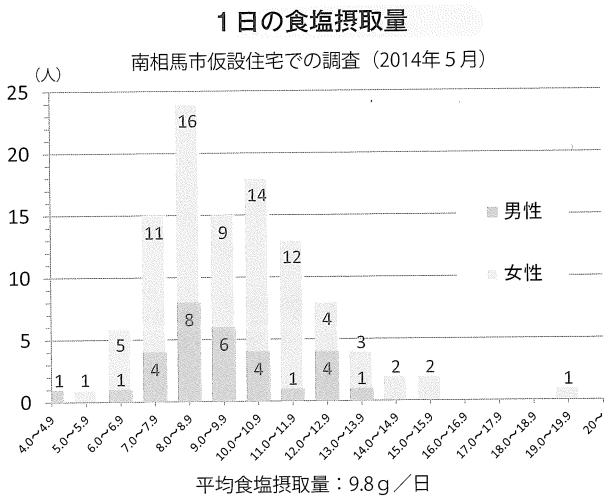
南相馬市立総合病院
副院長
及川友好氏

被災地に求められる真の議論

「人間ならば誰にでも現実の全てが見えるわけではない。多くの人は見たいと欲する現実しか見ていない」。ユリウス・カエサルの言葉である。2000年以上前の言葉だが、人間の変わらぬ本質を突いており、思わず頷かざるを得ない。

さて、周囲を見渡すと「都合のいい側面」をよりどころとした議論が往々にしてなされ、人の行動を促している。さまざまな教義の中から、聖戦だけを拾い上げれば9.11は正当化されるであろうし、相手の感情を理解しないストーカー行為さえも、同様の思考過程を経れば正当化される恐れがある。最近、某大臣が中間貯蔵施設選定をめぐって吐露した「最後は金目」という言葉は、その大臣の被災地問題に対する基準はどこにあるのか分かり、実に興味深かった。

先日、とあるコミックマガジンの作品の中で「鼻血が出たのは放射線を浴びたから」というような記述があり、世間を騒がせた。「鼻血が出た住民がいる」のは確かであり、そのこと自体に何ら疑いはないが、鼻血の原因を被曝と直接結びつけることは、あまりにも一方的な断定または妄想と感じてしまう。確かに、われわれ人類は、被曝の影響に対する全ての解を持っているわけではない。しかし、一方では「放射線障害に対する全ての解を持たないまでも、多くの明確な答えを持っていること」に気付き始めている。不確定要素に基づくより、確定要素に基づいた議論のほうが、実りある多くの結論が導き出されるはずである。もはや妄想や噂、御都合主義の情報で被災地を論ずる時期ではないことを強調したい。



昨年度から、当院による仮設住宅住民に対する本格的な被災地健康調査が始まった。それまでも他施設との共同研究はあったが、当院が全面的に行う仮設住宅での健康調査は初めてである。被災直後から避難所、仮設住宅に足を運び、共に泣き、共に笑った者として仮設住宅住民を研究対象とする事は忍びなく、調査研究が始まったのは震災後２年が経過してからであった。今回、「メタボリックシンドローム、ロコモティブシンドロームの予防」という掛け声のもと、継続して支援を行ってきた仮設住宅の居住者に、調査研究の協力を呼びかけたところ、ほぼ100％の協力が得られた。

調査前に「農作業もできず、狭い家屋で運動不足とストレスが重なり、血圧や体重が増加しているのではないか。また、食塩摂取量も多いだろう」と予想したが、仮設住宅に暮らすようになってから体重が増加した人や血圧が上昇した人は思いの外少なく、食塩摂取量に至っては平均が9.8ｇ／日であり、日本人の平均摂取量10～11ｇと比較してもやや少なかったのである。

われわれが得たデータは暫定的であり、バイアスが掛かっており、かつ統計学的に不備である。このようデータを以て仮設住宅居住者全体のデータとして話をしてしまえば、世間の失笑と独善の非難は免れない。

閉炉までの40年、道は長く険しい。われわれ自身が独善や妄想に陥れば、迷い、つまづき、立ち止まることになるだろう。地域の再建には、地域住民自身の放射線に関するリテラシーの獲得はもちろん必要だが、一方、被災地について意見を述べるマスメディアや有識者には、より一層の放射線に対する知識、被災地に対する現状把握と思いやり、さらには独善やドグマに陥らない柔軟な思考が求められることを強調したい。